

拝啓 今年も早や8月末、今年は特に暑い夏でした。お元気でお過ごしいただいたでしょうか。いつもエンカウンターお読みいただきありがとうございます。私の家の軒下の夕顔が元気よく伸びて、大きな葉をつけて、毎日20個ぐらい白い花を咲かせてくれます。公園では、さるすべりが、そろそろ終わりです。

相沢良一先生の「黒潮の神学」の第3回をお送りします。今月号の最初に、「親子三代の書」という題で、河上丈太郎先生の聖書の話が出ています。河上丈太郎先生が昭和40年に亡くなられたとき、朝日新聞（昭和40年12月4日）に「枕元に聖書1冊」という見出しの大きな記事が出ていたのを覚えています。

7月24日、25日と長野県穂高町で開かれた名古屋聖書集会の集まりに出席して、日野原重明先生の講演を聞いたことは、先月の手紙にも書きました。日野原先生の講演の題は、「わが喜びわが希望 輝いて生きる」で、いろいろなお話しが含まれていましたが、結論の部分お話しは次のようでした。「日野原先生が尊敬するオスラー博士は、平静の心を大切とされ、カーライルの言葉から、ぼんやりとした遠くのものを見ることでない、いまのことに全力投球した。救いは、いま、今日です。子供に、「いのちの授業」をしているが、「いのちは、めいめいが持っている時間です。」ということをお話されました。感話会で、私は、オスラー先生も、内村鑑三先生も、新渡戸稲造先生も、南原繁先生も、目の前の義務を果たせ、そうすれば次の義務はおのずと明らかになる、というこの言葉をカーライルのサーター・リサートスから学ばれ、大きな仕事を残された、と話しました。カーライルのこの言葉は、マタイ伝6章34節の「明日のことを思いわずらうな。明日のことは明日自身が思いわずらうであろう、一日の苦勞は、その日一日だけで十分である」から、来ていると思います。

8月6日から8日まで、本誌読者の佐藤昭夫さんと、南アルプス甲斐駒が岳（2967m）と仙丈岳（3033m）に登山してきました。昔、うつ病で治療を受けていた頃、主治医の山本哲弘先生が山の好きな方で、山本先生が、「山に行けば、生きていてよかったと思うでしょう」と言っておられましたが、本当にそのように感じました。

先月から、本誌読者米倉安雄さんのご配慮で、エンカウンターをパソコン上で、どなたでも読むことが出来るようになりました。次のアドレスを、インターネットの左上のアドレスの枠に入れて、検索してみてください。

<http://encounter.agape.gr.jp/>

穂高の写真の表紙ページがあらわれて、98号以降を読むことが出来ます。

暑さきびしき折から、お身体ご自愛のほど祈り申し上げます。 敬具

平成22年8月27日

山口周三

エンカウターの読者各位